動機づけを高める英語指導ストラテジー35

ゾルタン・ドルニェイ　著
米山朝二／関　昭典　訳

斎藤栄二
（関西大学教授）

「あなたが，生徒に勉強する気があるかないを問うたとしたら，その瞬間から，あなたは教師失格である。」

こう述べたのは，故若林俊輔教授である。この言葉は厳しい。しかしこれは「動機づけをすることから教師の仕事は始まっているのだ」ということを的確に表現している。動機づけをすることを放棄したら，そこですでに英語の教師としては失格しているという明確な認識を持っている教師は，それほど多いとは思えない。

現在は，目の前にいる生徒が，常に英語を学ぶ意欲に満ち溢れていて高度に動機づけされている，などという状態ではない。また今までかつてそういうことは一度もなかった。そういう境地は，すべての英語教師が望みながら，決して目の前には実現しないユートピアにすぎない。しかも私たちの生徒は，戦後だけとっても今までかつてなかったほど学習する動機を大幅に失っているのである。私たちが単純に「学べ」と言っても「なんで学ぶの？」と反論されたら，この反論に自信を持って答えるのは非常に難しい時代に入ってきている。

そこで教師は二つのグループに分かれる。第一のグループは，「どうせ生徒にはやる気がないのだから」と教師自身がやる気のない方に落ちていくグループ。第二のグループは，動機づけをすることも含めて，英語の授業の作戦を根本的に考え直そうとするグループ。

もし皆さんが，少しでも第二のグループに入ろうという気概があるのなら，ドルニェイの書いたこの本を読むことをお勧めする。

私は本書を読む間，ずっとドルニェイと会話を繰り返し続けていたと思う。彼が述べていることを，一つ一つ確かめるようにして読んでいった。彼の言うことのすべてに賛成ということではないが，彼の考え方の中に多くの示唆と知見を得ることができた。

この本に説得力があるのは，本書が単なる理論の書ではなく，著者の長年の実践的経験を土台としているからである。そしてまた，動機づけについて鋭い問題意識を持ち続けてこられた米山氏，関氏の訳者としての力を見逃すことはできない。

今最も必要とされている分野に，最も必要とされている訳書を送りだされたことに敬意を表したい。

基本単語徹底活用

英語のクロスワード101

山岡憲史　著

瀧口　優
（白梅学園短期大学教授）

クロスワード・パズルは「1913年にニューヨークで生まれて以来，人類が生み出した，もっとも庶民的で，しかも知的な遊びとして，アメリカで大流行してきた」（海江田進）と言われるように，それほど古いものではない。私個人はかつて学生時代に『英単語クロスワード』（岩田一男著）に出会い，このような英語の学び方もあるのかと強く印象付けられ，その後の教員生活において何度か利用させてもらった経験がある。英語が苦手な高校生にはむずかしすぎて，結局授業で出てきた単語を使っての簡単なクロスワードで留まっていた。

本書は高校教師としての著者が，長年にわたって授業で取り上げながら改良を加えてきたものの総まとめである。総語数は1400語で，高校の基礎的な単語がほぼ含まれている。

頁をめくって「CROSSWORD 1」に入ると，ヨコの欄で help, days, root 等14語，タテの欄で13語を書き込むようになっている。「カギ」のコーナーではワ

ード（単語）のヒントとして例文とその訳が載っているもの，同意語や反意語が載っているもの，熟語が載せてあるもの，解説がついているものなど多様である。アンネ・フランクなどの人物も登場し，単に単語を覚えるだけのための冊子というには留まらない内容になっている。「受験生からビジネスマンまで，通勤・通学のちょっとした時間を利用して，基本の英単語を押さえよう」という宣伝文句も控えめである。既に多くの利用者を経て新装されることになったという背景もあるのであろう。

英語に限らないが，勉強は苦労して我慢して行うものと日本では一般的に考えられている。しかし，学ぶということは楽しいことであり，ワクワクするような気持ちがなければ本当に身につくような学習にはなっていかないと私は考えている。本書は英語の学習に「楽しい」「ワクワクする」という気持ちを持たせることができるものとして活用されるであろう。

なお，101のクロスワードの中には著者がかつて授業で教えた生徒により作成されたものも含まれており，授業を生徒とともに作ろうとしている著者の姿勢がうかがえる。

頁数の関係で無理かもしれないが，巻末にワードリストがあると自分がどれだけ身についたのかをチェックできるのではないかと思う。次回の改訂の際には検討していただきたい。

左見右見（とみこうみ）四字熟語

別役　実　著

髙草真知子
（麗澤大学・麗澤中学高等学校講師）

漢字検定で高校生が最も苦手な分野は，四字熟語である。「お経みたいで，何言ってるのかわからない」「漢字ばかりで全然覚えられない」のだそうだ。

確かに，このところ日常会話の中で四字熟語を使うことが減ってきたように思う。学校で使う四字熟語といえば，定期考査，服装検査，三者面談，自宅謹慎……の類か。でも，これって，四字熟語といえるの？

一般に四字熟語とは，中国の故事や仏教語に由来し，教訓が含まれているものが多い。だが，著者はそれ以外にも，「あいつは一時停止のきかない奴でね」の「一時停止」のように，単に交通用語としてではなく四字熟語としても通用している語があるという。さらに，「全く新しい四字熟語が続々と出来るようになったら，その時こそ，四字熟語がよみがえったのだと，言えるだろう」（「あとがき」）と主張する。

ならば，「あの三人は三者面談の関係に陥った」（「この偏差値じゃあ，とてもこの大学はムリですね」⇨「もっと勉強しなきゃダメじゃないの」⇨「……」のような，くっきりした上下関係）とか，「社長は自宅謹慎の態度をとり続けた」（表向きは反省しているように見えて，実は何も思っちゃいない）という表現も，アリなのかもしれない。

それはともかく，本書は「焼肉定食」から「画竜点睛」まで，四十の四字熟語を取り上げて，別役流の解釈を試みたものである。

たとえば，「一病息災」。

著者はこの「一病」を何にすべきか悩んでいる。「『盲腸』や『歯痛』のように，医者が手軽に治してしまうものではいけないし，『インフルエンザ』や『切り傷』のような，症状が一過性のものであっても役に立たない。」「『痔がいいよ』と言うものもいる。[…]しかし，『あれには，ロマンチシズムがない』と言って嫌うむきもある」と，一向に決まらないのだ。

そして，「隔靴掻痒」。

「かっかそうよう」というメリハリのきいた音の響きと意味の深さは，まさに四字熟語の王様。私の好きな言葉である。靴の上からかゆいところをかくような事情をよく伝えていて，万人をうならせる。著者はこの言葉を「水虫文化圏が生んだもの」と考えた。水虫のひどい友人は，「コーモリ傘の先で靴を突つく癖をつけ，従って彼の靴の，親指のつけ根と覚しき辺りには，穴があいている」という。わお！　そんな人がいたら見てみたいな，その靴。

別役実と一緒に「左見右見（とみこうみ）」しながら，四字熟語を楽しみたい人におすすめの本。